創造のためのアート・アーカイブの試み

八　尾　里絵子

Attempt to Create an Art Archive for Creation

YAO Rieko

Abstract: Katsuhiro Yamaguchi, a fellow artist of mine, passed away in May 2018, leaving a vast number of items that cannot be categorized either as personal mementos or art materials. While these have to be archived as the art materials of a Japanese pioneer in media art, they remain largely untouched to date in the face of the strict standards of archiving.

Meanwhile, I realized that we should pay close attention to the reproduction of works carried out in the universities and research organizations that are specialized in artistic expressions in recent years and new creativities generated from them as one of the new ways to read archive materials. The use of archives as a means of creation has the risk of essentially invalidating archives, but at the same time, I believe it is highly worthwhile to challenge the ideas of archives and creativity.

This article introduces examples related to archives and creation and mentions how AI can be used in art. It also reports on the attempt to create new works from Yamaguchi's art materials. The future direction of the research was determined when I learned after going through these considerations that he had talked about "creating new works in an archive".

Key Words: art archive, Katsuhiro Yamaguchi, creativity

要旨：2018 年 5 月，これまで共に作品制作を行ってきた山口勝弘が逝去し，遺品とも美術資料ともいえないおびただしい量の物品をご遺族から預かることとなった。これらを，日本のメディアアートの先駆者の美術資料としてアーカイブしなければならない一方，アーカイブ作業の厳しい基準を目の当たりにし，今日までほとんど手つかずの状態であった。

そんななか，近年の美術・表現系の大学や研究機関が行なっている作品の再制作や，そこから生まれる新たな創造性が，新しいアーカイブ資料の読み方のひとつとして注目すべき点であることに気づいた。アーカイブを創造の手段に用いる事は，アーカイブを本質的に無効化してしまう危険性があるが，同時にアーカイブと創造性について挑戦する価値も大きいと考えている。

本稿ではアーカイブと創造に関わる事例を紹介し，AI のアートへの活用法についても言及する。また，山口の美術資料から新たな創造を生み出す試みについて報告する。これらの考察を経た今，山口が「アーカイブで新作を創る。」と過去に語っていたことを知り，今後の調査の方向性が決定づけられた。

キーワード：アート・アーカイブ，山口勝弘，創造性

は　じ　め　に

近年，芸術系の大学や研究機関においてアート・アーカイブの活動が盛んになってきている。アート・アーカ

イブはまだ一般的には定義されていないが，京都市立芸術大学の Web サイトでは「アーティストの手稿，写真，映像など，作家や作品ゆかりの資料・記録類」としている。同大学では，これらの美術資料を読み取り作品を再制作することで，新たなアーカイブを作り出すプロジェクトが進んでいる。これは，アーキビストによって従来行われてきたアーカイブ作業とは異なる，表現系研究者にとっては新たな方向性と考えられる。

アーカイブについて考えるきっかけとなったのは，2018 年 5 月の山口勝弘の逝去である。私をはじめとする 3 名の共同研究者は，日本のメディア・アートの先駆者といわれる山口の創作活動のサポートを，彼の最晩年となる 2010 年頃から約 8 年間行ってきた[1)]。山口の死後，それまでの関係性から，私たちは夥しい量の遺品をご遺族から預かることになり，今日に至る。遺品はアーティストの最晩年まで大切にしていた所持品であり，中には，何らかのメディアで見たことのあるような貴重な資料の現物や，美術資料として重要そうなモノがある。その一方で，ほぼ不要と考えて良さそうなモノが，数十個の箱に渾然一体と納まっている。私たちは託された美術資料をアーカイブする必要に迫られているものの，これらの膨大な資料を前に，様々な問題が上手く処理できずにいる。

その理由のひとつとして，アーカイブ作業の基準の厳しさがある。アーキビストには国立公文書館の厳しい職務基準があり，アーカイブするということは，その基準を遵守して，人間の知を未来に伝えてゆくという使命がある。つまり，個人的な判断でモノの要不要や価値感の判断を下すのではなく，全ての資料を等価に扱う姿勢が重要なのである。でなければ，アーカイブそのものの有効性が失われ，資料の信ぴょう性や価値までもが揺らいでしまうからである。その実務の厳格さは，2015 年に訪問した慶應義塾大学アート・センター内のアーカイブ室でも確認している。そこには山口が 20 代の頃，美術家として大きく前進するきっかけとなった瀧口修造のアーカイブ資料がまとめられていた。多くの資料の中から，山口から瀧口に宛てたという一通の古びた葉書を取り出して頂いた。丁寧な保管状況や取り扱い方への配慮，資料を分析してリスト化[2)]する様子は，アーカイブという作業の厳しさを知ることとなった。

1. アーカイブと「創造性」

アーカイブの意義を理解しつつも，目の前にある膨大な資料に手がつけられない日々を送るなか，アーカイブにも新たな側面があることを知った。2014 年 11 月，京都市立芸術大学芸術資源研究センター主催のシンポジウム「来たるべきアート・アーカイブ　大学と美術館の役割」のなかで，「アーカイブを創造的な技法としてとらえる」という考えが示されていたのである。制作者の立場から発表した同大学の石原友明教授は，アーカイブを創造的な技法として捉えると 2 つの視点があることを指摘した。ひとつは，情報を記録する技法としての“書き方”，もうひとつは，記録されたアーカイブを読み解く技法としての“読み方”としている[3)]。そして，経験の記述法（書き方）としてモデルになるのが楽譜の記譜法であるとし，“書き方”の「記譜」に対応し，“読み方”の「演奏」があると述べた。「記譜」は無数の創造性があり，それこそが制作者にとって創造行為である。“読み方”は「演奏」であり，記譜されたものを基準としその読み取り方や解釈によって，多様な方向性へと表現を導く。つまり“読み方”もまた，無数の創造性を秘めているのである。さらに石原氏は，「わざと読みかえ，取り違えるという『創造的誤読』には，もとの文脈を剥がして新しい文脈に位置づけ，身体的なレベルでつくりかえること」[4)]が重要な問題と捉えている。

このシンポジウムで述べられたアーカイブへの新しい主張は，アーカイブをどのように読んでゆくか，その読み方でどのような創造を生み出すことができるかを問うものとして，表現系研究者に新たな研究の指針を示したといえよう。とはいえ，アーカイブを「創造」の手段に用いる事は，アーカイブを本質的に無効化してしまう危険性があるが，同時にアーカイブと創造性について挑戦する価値も大きい。

2. 創造のためのアーカイブ事例

では，従来のアーカイブのスタイルとは異なる「アーカイブを創造的な技法としてとらえる」とはどのような方法があるのか，アーカイブと新たな創造，創作を結びつける事例として 3 つの観点から言及する。まず，近年

盛んになっているアート作品の修復や再制作の動向から，「アーカイブ化を目的とした作品の再制作」について考察する。現在最もよくみられる手法であり，アーティスト自身による作品の再制作や，アーティストが故人となっている場合は，表現系研究者がアーカイブ資料を読み取り作品の再制作を行う。次に，「アーカイブ資料に基づく復元」について考察する。修復や再制作のように元々の作品に再度手を入れ直すのではなく，アーカイブ資料を厳密に読み取りながら，作品をもとの姿に戻すことが焦点である。そして，「アーカイブ資料からの新しい創造」という観点では，膨大なアーカイブ資料の分析を AI に託し，まったく新しい創造性を生み出すという例をとりあげる。

(1) アーカイブ化を目的とした再制作

美学・聴覚文化研究者の金子智太郎氏らが 2017 年から主催している《日本美術サウンドアーカイヴ》[5]は，1970 年代の日本のサウンドアート作品を，作家本人による再制作や再展示，再演によって，現代に残してゆく活動である。美術史は基本的に視覚資料が中心でまとめられてきたため，サウンドアートのように，音を表現メディアとする美術作品の情報はほとんど残されていない。特に音は再生メディアも著しく変化している。例えばレコード盤や公衆電話，磁気テープなどのメディアは，今日では調達すら困難になっており，このようなメディアを用いた作品の完全な再制作も難しくなっている。

2018 年 3 月，現代美術家の野村仁氏の 1973 年の作品《音調，強度，時間を意識して，レコード（糸）を操作する》が，南青山にある小さなギャラリーで展示された。展示空間はとても狭く，壁側にレコードプレイヤーが置かれ，その壁には異なる種類の 8 本の糸がかかっている。鑑賞者はその糸を両手で持ち，そのままゆっくり動かして糸をレコード針にこすりつけると，針が振動しレコードプレイヤーから音が聞こえるというものである。レコード盤に音溝があるように，それらの糸の表面にも凹凸がある。それをレコード針で読み取り，音に変換する。野村氏は当時，このように聴覚からイメージを生み出すことができるような作品を「聴覚映像」とよんでいた。「聴覚映像」の特徴について金子氏は，「異なるメディア，異なる感覚の結合を通じて物事を変換し，この変換によって生まれる違いに目を向けるという手続き」と再制作時に論じた[6]。

サウンドアートは特に，美術史の中でも残されている資料があまりにも少なく，どのような音が聴こえていたのかがわからなくなっている。メディアが多様化しその作品に適した方法で記録することが可能となった現代，作品の再制作を行うことで，アーカイブ資料となる記録を残してゆくことができる。このようなアーカイブ活動は，これからの新しい創造活動にもなりうると考えられる。

(2) アーカイブ資料に基づく復元

大阪大学の圀府寺司教授らは，2017 年 10 月，北海道立近代美術館で開催した「ゴッホ展　巡りゆく日本の夢」において，ファン・ゴッホ作《恋人たちのいるラングロワの橋》（1888 頃）の復元作品を公開した。この作品は，ゴッホが何らかの理由により途中で描くのをやめてしまったとみられている。一部のみ残った断片の作品《水夫と恋人》[7]やスケッチなどが残されており，これらの資料を元に，ゴッホがどのような絵を描こうとしたのかを分析し，油絵画家の古賀陽子氏が復元作業を行なった[8]。

さて，ここではゴッホの描画技法を具現化した画家，古賀氏の復元作業について論及する。彼女は，全編油彩絵画の長編アニメーション映画《ゴッホ～最期の手紙～》（2017）に，唯一日本人で参加した油彩画家である。この作品は，世界中から 125 人の画家が集められ，ゴッホと同じ描画技法で総数約 65,000 フレームを描いた，史上初の油絵アニメーションである。そのうちの 580 枚を，ポーランドでゴッホの描画技法の訓練を受けた古賀氏が描いたということから，「ゴッホ風」の描写ということに関して，現在，国内で誰よりも精通していると考えられる。彼女は，《恋人たちのいるラングロワの橋》の復元にあたり，圀府寺教授の分析を元に現存する部分の模写を徹底的に行い，ゴッホのアプローチを「描くことで」分析したという。例えば，復元で使用する絵具について，現在の市販の絵具だと当時のものとは色味も質感も異なるため，絵具の調子を自作してゆく必要があった。それだけではなく，資料として保管されているゴッホの手紙に書かれていた色指定を採用したり，断片作品には存在していない太陽，空，樹木，跳ね橋などのモチーフは，ゴッホが同年代に描いた作品を参考に描いたという[9]。

このプロジェクトは，ゴッホが描かなかった「ある部分」について，ゴッホ研究の第一人者の緻密な資料分析

と，ゴッホの描く技法を得意とする画家が協同して復元作品に挑んだものである。古賀氏は「ゴッホらしさ」を発見し表現しながらも，捏造感がでないようにその描き方を追求すると語った。つまり，ゴッホの描くタッチの絶妙なバランス感覚と力強い表現力を踏襲しながら，違う描き方，しかし，紛れもなくゴッホらしさを描き出す，という微妙な兼ね合いが，その復元作品に込められている興味深い例である。

(3) アーカイブ資料からまったく新しい創造へ

2016 年《The Next Rembrandt》プロジェクト[10]において，17 世紀の画家レンブラントの「新作」が発表され話題となった。このプロジェクトは，機械学習した AI によって「レンブラントらしさ」を解析し，その結果から，今までに見たことのない新しいレンブラントの絵画を生み出すというものである。ここではそのプロセスについて，作品分析の方法，新作の題材，制作方法の 3 点について概略する。

①作品分析の方法：機械学習

346 点に及ぶレンブラントの全作品を 3 D スキャンでデジタル化する。この時，絵具の凹凸に至るまでを完全にデータ化し，描画タッチや色使い，レイアウトなど，レンブラント作品の特徴をディープラーニングアルゴリズムによって分析する。

②新作の題材

新しい作品の題材に向け，レンブラントの作品に共通する題材（例えば，形状と構図，画材や筆使いなど）をアルゴリズムで抽出し，新作の題材を特定する。それは，最もレンブラントらしく見える絵画のモチーフとして「肖像画」を選んだ。肖像画の人物像の決定にもアルゴリズムを用い，「向かって右側を向いた 30～40 代の白人男性で，襟のある黒い服，帽子を着用する」とした。

③肖像画の制作方法：アルゴリズムの開発

条件を満たす主題を「レンブラント風」でコンピューターに描き出させるため，顔の各パーツのレイアウト比率や服，その他描き方の特徴などを再現するアルゴリズムを開発した。

このように《The Next Rembrandt》プロジェクトは，膨大な美術資料のデータをまったく新しい創造のために用いた新規性のある事例であると共に，AI のアートへの活用法のひとつとして注目できる。この動向は絵画だけでなく音楽演奏においても同様で，今は亡き 20 世紀最大のピアニストであるリヒテルと，現在のベルリンフィルアンサンブルが同じ空間で共演[11]することも実現している。また，2019 年 9 月に放送された NHK スペシャル《AI でよみがえる　美空ひばり》においては，AI が「人間の行い」を再現する事の何を不得意とするのかが明示された。それは，美空ひばりの「声の奥深さ」の再現であり，それこそがその人の個性であり，AI で再現するのが困難であると結論づけた。

このように AI によって新たな創造性を生成することは，AI の可能性を追求すると共に，人間の可能性をも知る興味深い事例となる。尚，(2) と (3) の例はいづれも作品スタイルが油彩の絵画であるが，前者では，現代の卓越した画家の技術で復元した，一言でいえば，「故人が憑依したような表現」である。後者は AI 技術によって，誰が見ても「故人が描いた新作」と捉えることができるかもしれない。生身の人間の技術と AI の技術との対比も興味深い事例である。

3. 創造のためのアーカイブを試作する～FAX 文書のリスト化からみえるもの

さて，美術資料のアーカイブについて「アーカイブを創造的な技法としてとらえる」つまり，新たな「創造のためのアーカイブ」という視点を持てば，現在，私をはじめとする共同研究チームが持つ様々な問題が改善に向かう。ここで，「創造のためのアーカイブ」という考えから，ひとつの試作をしてみよう。用いる資料は，山口と私たちで往復した FAX 文書のうち，山口から送られた 50 点とする。

山口は 2000 年以降，半身不随となり表舞台から退いたが，亡くなる直前まで表現を追求し，新しい作品とアイデアを生み出していた。その頃前後して，爆発的に情報化社会が進んだこともあり，山口はインターネットを使う事はなく，情報収集には書物や会話，テレビを主なメディアとしていた。その上，私たちとのやりとりは FAX

と電話，手紙が主流であり，時には FAX の文言のぼんやりとしたイメージを理解するために，居住地を訪問してその空気にも近い「感覚」を取得するようにしていた。

山口が逝去するまで繰り返された往復書簡のうち確認できているのは，2010 年 4 月 21 日に突然送られてきた封書に始まり，2017 年 12 月 17 日の FAX までの約 50 通である。これについて，発信日時と用件の概要，キーワード等を時系列で並べてみたところ（表 1），いくつかの構想のアイデアと新作発表へのこだわりを見つけることができた。まずは FAX の内容を確認し，そこからキーワードを抽出してみたところ，かつての山口がよく発し

表 1

日付	メディア	FAX内容の概要	キーワード（修正せずに原文より抽出）
20100421	手紙	**新作「祈りの祠計画」**CG映像作成依頼、図あり	祈りの空間（祠）/ 輪の中へ入れる / 眼の形の周囲は渦が流れます
20110612	手紙	山口研究、新作レクイエムについてをすすめるように	雑誌文献は私命より大切
20110616	ハガキ		オブジェブックは私の引出
20110618	FAX		机の左側の引出
20110704	ハガキ		建築家の石山修武
20110711	FAX		三陸の青い海への鎮魂と、船出のエールを
20110714	FAX		Katsuhiro Yamaguchi, artist
20110717	ハガキ	訪問のお礼	作品に手を入れてみました
20110820	ハガキ	残暑見舞い、斎藤さだむに写真撮影のため作品を持ち出した	絵画11枚 スケッチブック2枚
20111213	ハガキ		美味しいお菓子
20120618	ハガキ	訪問のお礼、プランをすすめているとのこと	小生のプランで二歩前進
20130218	FAX	**新作「三陸パノラマ」**案について、鯰の大宴会	地震を起こす鯰を招待して大宴会を開いた
20130411	FAX	**新作デジタルドラマ**案についての具体的な内容	音楽はオンドマルトノ / 人間とロボットの織りなすロボリンピック
20130506	FAX	展覧会を神戸ビエンナーレにPRせよ、デウスエクスマキナ案	シチリアのマルチメディア作品デウスエクスマキーナ
20130522	FAX	美術館にある浮世絵資料のコピーの依頼　　（鯰の作品）	国際版画美術館
20130524	FAX	デウスエクスマキナの出場方法を考える、JAXAに相談など	ロボット筑波のJAXA
20130526	FAX	メディアオペラの登場方法、GOLDのデウスエクスマキナ、宇宙服	メディアオペラへの登場
20130620	FAX	展覧会の日程問い合わせ、イカロスシルーズ保管場所	展覧会の正式日程
20130628	FAX	過去の自身の記事を読み、現在につながることを確信する	ジャパンインテリアの山口勝弘特集号
20130630	FAX	イカロスの出品数、三陸のリバイバル版を作成中	イカロス展出品作品
20130727	FAX	作品フレームの打ち合わせをしたいので連絡せよ	作品のフレーム
20130819	FAX	停電、ヴィトリーヌ枠発注報告、訪問を求める	8月12夜雷が近くに３発落電
20130825	FAX	フレネルレンズシート作成依頼	フレネルレンズのシート
20130827	FAX	フレネルとダイヤプラスティックの効果実験報告	ダイヤプラスチック
20130902	FAX	Annely Juda Fine Artの展覧会告知、おかげで新作３点	Annely Juda FineArt
20130904	FAX	芸工大展への作品出品数について	イカロスシリーズ
20131006	FAX	芸工大展パンフについて住所表記せよ	三陸リバイバル
20131107	ハガキ		ヤシャライハートさん
20131114	FAX	ロンドンで開催したIMAGINARIUM展の記事	IMAGINARIUM
20140219	FAX	（新作の構想か？）病状からNewton、太陽系、ジョージガモフ	内田百鬼園先生
20140305	FAX	FAX番号の問い合わせ	小林元
20140905	FAX	新作発表の立会いを依頼	新作発表
20150805	FAX	マネキンに着せる服を探せ	マネキン人形に着せる衣装
20160222	FAX	北市のFAX 問い合わせ	Fax番号
20160224	FAX	映像学会の発表、北市に依頼、**富士山とゴキブリ**を完成せよ	日本の歌舞伎の見栄とスポーツのクライマックス
20160304	FAX	富士山とゴキブリの作成協力依頼、ヴィトリーヌ0号発見した	ヴィトリーヌ0号
20160312	FAX	オリンピックがらみの展覧会にヴィトリーヌを出す	あのヘアトニックは小生がデザインした
20160326	FAX	ヴィトリーヌの面について、双眼鏡、アクリル板	大阪天神橋商店街パブリックアート
20160411	FAX	学会発表用に書いた北市の文章のお礼と作品の音楽への指示	少年少女の合唱コンクール日本一の山
20160424	FAX	富士山とゴキブリの映像素材の具体的な指示	ゴキブリ柱を集まる状態を文字表現
20160520	FAX	富士山とゴキブリをDVDにしてアルスエレクトロニカに送れ	Mount Fuji and Golden Cockroach
20160524	FAX	富士山とゴキブリの音楽の手直しについての具体的な指示	トルコ行進曲　メデタシメデタシ
20160611	FAX	森美術館への貸し出し資料は大切なものなので注意して扱え	門外不出の大切なもの
20160630	FAX	富士山とゴキブリをDVDにしアルスエレクトロニカに送るよう指示	
20160707	FAX	美術史と共に生きる（エッセイ？）シュトックハウゼン、ピカソ	美術史と共に生きる
20170514	FAX	絵画を３人に送る、同窓会のこと、作品を作れる幸せ	日比谷高校の同期会
20170819	FAX	**リベールリベール**の制作依頼	リベールリベール
20170821	FAX	新作リベールリベール、竹林にレーザー光	民家園で竹林にてレーザ光
20170829	FAX	新作のための民家園へロケハンをする	ロケハン
20170831	FAX	新作のため10日に民家園へロケハン、門屋へ依頼	小生所有のカメラ
20171218	FAX	ヤシャライハートからチェコへの作品オファ	蛍光菊展の原稿

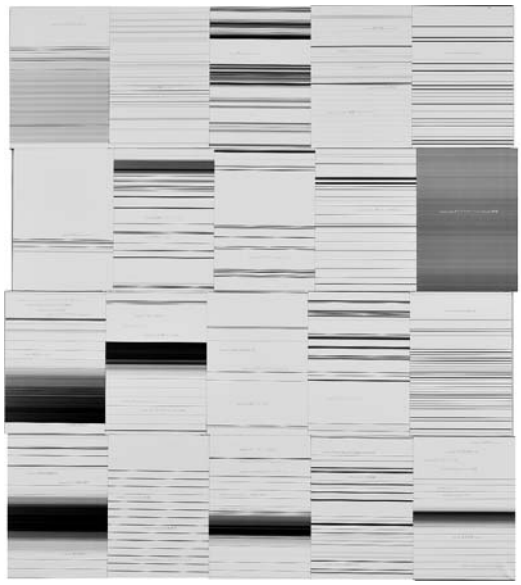

図 1　作品《Letters》全体

図 2　作品《Letters》部分拡大

ていた「山口らしさ」が浮かび上がってきた。その言葉遣いの面白さに興味を持ち，50 のことばからなるグラフィックアートを《Letters》（図 1，2）というタイトルで発表した[12)]。これを，美術資料をアーカイブし，それらを素材として新たな創作へ向かった試作と捉えたい。

次に注目したのは，山口からの FAX 文書にはいくつかの構想（表 1 太字）が書かれていたという点である。構想は，単なる空想なのか本気で実現しようとしていたのか，当時はそのスケールの壮大さに私たちは戸惑っていた。構想にはまずタイトルがつけられ，その後，もう少し具体的にイメージが書かれている。現在確認できている構想のタイトルは，《祈りの祠計画》《三陸パノラマ》《デジタルドラマ》《富士山とゴキブリ》《リベールリベール》の 5 件であり，具現化したのは 2016 年に約 6 分の焼役ビデオ作品として発表した《Mount Fuji and Golden Cockroach－富士山とゴキブリ》[13)]のみである。

ここで，最もユニークな構想であった《デジタルドラマ》の構想を 2013 年 4 月 11 日の FAX より，原文に近いまま紹介する。尚，読解困難な活字が存在するため，精密な読み取りは今後の課題とする。

2000 年　場所　ギリシヤの古代劇場
物と人間とロボットの織りなすロボリンピックと云う仮想空間と現代を組み合わせるデジタルドラマです。
音楽はオンドマルトノと云う電子楽器を使う。
現代人がギリシヤへ行き　昼寝の中に出てくる仮装劇ですから　そこへ機械仕掛けの神様（Deus Ex Machina）と日本人旅行者の夢見心地の物語です。
バロック時代の湖と劇場，美しき乙女が割り込んできます。私の長い間の夢物語。

また，翌 5 月 23 日の FAX ではさらに具体的なイメージの描写がなされた。

メディアオペラへの登場
漆黒の手袋及びブーツ
GOLD 衣装にブーツを着用
Golden Deus Ex Machina
黄金色の宇宙服の ROBOT が黒い手袋とブーツを着用した姿で登場します。

このように山口は，頭に浮かんだイメージの世界を書き留め，そしてそれは何の前ぶれもなく，ある日突然FAX で送られてくるのであった。しかもこの文章でもわかるように，これが新作といっても映像なのかインスタレーションなのか，パフォーマンスなのか，表現形式の判別がつかない。私たちが山口からの指示により何らかの作業を進めていると，いつの間にか本人は次の「新作」構想を考え出し，再び FAX を送ってくるのである。これを幾度か繰り返すため，私たちはこれらの構想を作品にならない「未完のプロジェクト」と読んでいたが，山口の死後，今夏になってようやく，これが作品であることに気付いた。晩年の山口の代表的な作品には，《顔曼荼羅シリーズ》（205-2007）や《三陸レクイエム》（2011）などのドローイングがあげられ，これは「モノ」として存在している。しかしながら，この FAX に書かれた文書のように，「モノ」としては実現しない構想，コンセプチュアルアートに最晩年の山口らしさが存在していたのである。山口がかつて提唱した「イマジナリウム」[14]の思想によれば，芸術作品は必ずしも「モノ」として存在する必要はなく，様々なメディアを介して示されるコンセプトのみでも成立しうるとした。こうした立場に立てば，先に紹介した「デジタルドラマ」の構想なども独立した作品となるのである。そして，これを発見し次への創造に導くこと，それが，新たな「創造のためのアーカイブ」となるのである。

おわりに　～「アーカイブで新作を創る」

創造性とアーカイブについて考察するうちに，アーカイブする資料はどんどん増えてゆき，さらに昨今の情報化に伴って，モノとしては存在していないデータも資料として日々増加してゆく。現代の作家は，自身でアーカイブしながら自身の表現を未来へ残してゆくことが可能となっている。

山口の遺品を傍観してみると，日記や手紙，メモやスケッチ，写真やビデオ，そのほかにも何気ないモノがあまりにも多い。その一方で，重要な美術資料も手元に置いていて，数々の展覧会での展示資料のキャプションに「山口勝弘所蔵」と書かれていたのも何度か目にした。この状態から言えることは，山口はただ「物持ちの良いアーティスト」というのではなく，日々を自身でアーカイブすることを意識しながら生きてきたのであろう。

つい先日，アートプランナーの影山幸一氏のインタビューで，2006 年に山口がアーカイブに関して言及していることを知った[15]。2006 年は戦後日本の前衛芸術が国内外で高く評価され，山口も属していた実験工房をはじめ，関西の具体美術協会も，展覧会などで知る機会が増えた時期である。同年，山口の大規模個展「メディア・アートの先駆者　山口勝弘展『実験工房』からテアトリーヌまで」が神奈川県立近代美術館鎌倉で開催されている。インタビューを受け山口は，「アーカイブと共に生きている。アーカイブを自分で生産している。アーカイブから作品が生まれる」と語っていたという。

「アーカイブで新作を創る。」

これを山口がすでに行っていたことで，改めて今後の研究方針が明確となった。

【注釈】

1）北市記子・八尾里絵子・門屋博「『回遊する思考：山口勝弘展』の作品群からみる創造性とテクノロジーの関係性について」環境芸術学会学会誌「環境芸術」第 13 号，pp.88-96, 2014 年 10 月

2）慶応義塾大学アート・センターの平成 26 年度文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業報告書“ARCMA Report 2014”p.52 には「『山口勝弘』検索結果」という項目があり，所蔵する資料の一覧を見ることができる。

3）シンポジウム「来たるべきアート・アーカイブ　大学と美術館の役割」レポート：どこへどのように向かうのか？　芸術作品の資料の行方，影山幸一，https://artscape.jp/report/topics/10105756_4278.html（2019 年 10 月 28 日）

4）同上

5）日本美術サウンドアーカイヴは，https://japaneseartsoundarchive.com/ を参照。2019 年 7 月までに 8 名の作家の再制作と展示を行なってきた。

6）金子智太郎「別物になる音－1970 年代における野村仁の『聴覚映像』」，日本美術サウンドアーカイブ《音調，強度，時間を意識して，レコード（糸）を操作する》展覧会配布資料，2018 年 3 月

7）ゴッホの 1888 年の作品。元々は 30 号（約 910×730 mm）程度の油絵と考えられているが，現存しているのは約 330×230 mm の部分のみ。切り取られた理由は不明，2013 年のオークションで日本人が落札した。

8）北海道新聞　2017 年 8 月 25 日の記事（古賀陽子氏 Instagram 2017 年 9 月 1 日公開画像より）および

https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2017/09/0930.html（2019 年 10 月 28 日）
　ちなみに，古賀氏は甲南女子高校の卒業生であり，2019 年 10 月 1 日に短時間のインタビューを行なった。

9）「ゴッホの幻の作品を日本人画家が復元に挑戦！」excite ニュース　2017 年 10 月 5 日
https://www.excite.co.jp/news/article/Ignite_105921/（2019 年 10 月 28 日）

10）マイクロソフトとオランダの金融機関 ING グループ，レンブラント博物館，デルフト工科大学などによるプロジェクト。https://www.nextrembrandt.com/ でその詳細を見ることができる。

11）YAMAHA 社の人工知能合奏システム MuEns。
https://www.yamaha.com/ja/news_release/2016/16041501/（2019 年 10 月 28 日）

12）筆者の個人制作である本作は，厚さ 3 mm の A 3 サイズのベニアパネルを，縦 5 点横 4 点の計 20 点配置したもので，完成サイズ約 1700×1500（mm）となる。20 点のなかに 50 の言葉を時系列で配置し，出力したものを 1 枚ずつ水張りし組み立てた。言葉以外の背景部分は，FAX 文書をスキャンしプログラムで画像処理したものである。作品は，モダンアート協会主催「第 69 回モダンアート展」に出品，デザイン部門で入選し東京都美術館（2019 年 4 月 3 日－16 日）で展示された。

13）山口勝弘と北市記子の共同発表，日本映像学会第 42 回全国大会（日本映画大学），2016 年 5 月 28 日。筆者も映像制作のための撮影，編集および発表等をサポートした。

14）山口勝弘の長年のコンセプトである「イマジナリウム」については，株式会社アートイットのウェブ記事“ART iT”より，次の 2 件を参照。「山口勝弘　時空を回遊する想像的行為」，「山口勝弘〈イマジナリウム〉（1981 年）」。

15）影山幸一「アーカイブで新作を創る。パノラマの宇宙を夢見るメディア・アーティスト「山口勝弘」」，2006 年
http://www.dnp.co.jp/artscape/artreport/it/k_0603.html（2019 年 10 月 28 日）

【図版】

（図 1）作品《Letters》全体，「第 69 回モダンアート展」図録 p.95，モダンアート協会，2019 年
（図 2）作品《Letters》部分拡大